

語られない韓国

— 「満韓ところぐ」の連載中止と関連して —

劉 銀 炅

はじめに

夏目漱石の紀行文「満韓ところぐ」^①（以下「満韓」と略記）の『東京朝日新聞』での連載が始まったのは一九〇九年十月二十一日である。それから約一年後、日韓併合条約により韓国は日本の植民地になる。「満韓」が予定通り書かれたら、併合直前の韓国の様子が漱石の目にどう映り、人々はどうのように暮らしていたのかを窺うよい資料になったかもしれない。しかし、「満韓」は満州の撫順で終っている。実際、漱石は一九〇九年九月二日から十月十四日まで、大連・旅順・營口・奉天・撫順・長春・ハルビンなどの満州と、平壤・京城・開城・仁川・釜山などの韓国を旅している。しかし、タイトルにもある「韓」の部分は書かれていない。本論では「満韓」で「韓」の部分が書かれていない理由を探り、そこから窺える漱石の韓国認識を再検討したい。

一．「満韓」に対する批判と擁護

「満韓」は漱石の作品のなかでは研究は少ないが、少ない研究の

中で批判が多い作品である。その理由の一つは、「満韓」には満州や韓国に対する漱石の植民地主義的で、蔑視の感情が表れているということによる。植民地主義によって満州や韓国を蔑視しているなどの批判の中でも、中野重治の指摘がよく知られている。ここでは例えば次のような「満韓」の部分が批判の対象になっている。

ことに馬車に至つては、其昔日露戦争当時、露助が大連を上る際に、此儘日本人に引渡すのは残念だと云ふので、御丁寧に穴を掘つて、土の中に埋めて行つたのを、チャンが土の臭を嗅いで歩いて、たうとう嗅ぎ中てて、一つ掘つては鳴動させ、二つ掘つては鳴動させ……（『満韓』『漱石全集』第十二巻、四、二三―三五頁）

中野は右の箇所について次のように批判している。

「満韓ところどころ」はさほど重要なものではない。漱石のものとしてもさほど重要でなく、ひろく明治大正の紀行、小品

としても格別のものではない。それでも、いま読みかえしていくつかのことに気づく。そのひとつは、漱石のような人のなかにもあった中国人観、朝鮮人観、それが、ごく自然に帝国主義、植民主義にしみていたという事実だろう。ごく自然にというところが肝腎のところだろう。何とも思わずに、中国人を、あの漱石のような人が「チャン」と書いてははばからなかった。³〔中野重治全集〕第二十三巻、一九九頁）

この中野の批判以来、針生一郎⁴は、明治知識人たちが朝鮮・中国に対して「自己が日本の帝国主義の膨張に支えられた加害者、抑圧者である」という認識が欠けているため、リベリズムはたちまち国権的民族意識にからめとられ、アジア主義は容易に排外的侵略思想に転化した」とし、「ロンドン留学のはじめさのうちに日本人のアイデンティティを痛切に求めながら、日本の皮相な西欧化に絶望した」のは漱石一人だと言いながらも「『満韓とこころ』⁵では、日本帝国主義の先兵としての満鉄の役わりにも、抑圧と搾取のもとにある中国民衆の状況にも、鈍感で無知な感想をならべているのを見れば、民族の歴史的矛盾は個人のうちに深くくいこんで拭いがたいことが痛感される」とした。

近年では朴裕河⁶が、漱石が韓国の「発展」ぶりに感心していたとし、「満韓に出来た日本の町は、日本の伝統的姿でありながらも一方ではごきれいな〈文明〉の顔をもつてそこに存在していたが、当時の日本人がそうだったように大陸への進出を〈文明〉の移植と漱石も考えていたよう」で、「漱石が拒否した〈異質性〉は、結局

〈文明〉度の差による部分が大きかったとも言える。つまり、漱石は一方で文明批判の視点を持ちつつも、〈文明〉を否定してのみいたわけではないのである。すくなくとも漱石は「満韓」においては〈開化〉〈文明〉を批判しない」とし、「満韓」は当時の人びとにとっては「単なる植民地視察記」であり、それで漱石の「満韓」中止も「漱石にとってあえて書かれるべき必然性のなかった不幸な作品で、『満韓』中止は漱石自信にその原因があった」としている。

その原因として「自己の中のエゴを内なる他者として相対化することによって人間への理解を深め得た類稀な作家だったが、〈異質性〉をもつ他者に対しては心を閉ざし、排除しがちであった」と結論づけている。その他にも朴春日⁷、呂元明⁸など多くの研究者がほぼ同じ理由で「満韓」を批判している。

しかし、「漱石のような人のなかにもあった中国人観、朝鮮人観、それが、ごく自然に帝国主義、植民主義にしみていた」という中野の批判をもう一度考えてみる必要がある。はたして「漱石のような人」が「ごく自然に帝国主義、植民主義にしみていた」ことをごく自然に新聞に連載したのでろうか。批判の論点は、文明に対する否定的視線を持っていた稀な明治の知識人であった漱石であっても満韓に対しては批判的姿勢を持つことが出来なかったという点である。だが、このような批判は、植民地主義に対する批判が盛んに行なわれていた一九九〇年代の産物としてみることも出来なくはないだろう。『吾輩は猫である』や『坊ちゃん』などからうかがえる漱石の風刺的視線は「満韓」では見えず、ただ見たものをそのまま書いただけであるからという理由で批判するのは、それこそ傾いた批

判ではないだろうか。たとえば、米田利昭は、クーリーを貶めることによつて諧謔的に中村是公らをけなす意図があると評し、伊豆利彦は、国家権力の影響下にありつつ文学者としての表現法を工夫した結果、作られた滑稽化された文体であると評している。作家の手を離れた作品は、見る人の目が見ようとするとするものに見えてしまうものでもあるだろう。ある人には肯定的に見える表現も、ある人には否定的に見える。「漱石のような人」が植民地主義だと考えられそうな表現をそのまま書いたと見るのであれば、作品はそういう作品になるのである。

次章からはこのような「満韓」に対する批判を乗り越えるために、「満韓」を精読することで漱石が「満韓」を書いた動機と「韓」の部分を書いていない理由を探り、漱石の韓国観を改めて検討したい。

二．「満韓」旅行の動機

漱石が満韓旅行をしたのは第一高等中学校の同期であつた南満洲鉄道株式会社（以下満鉄）の総裁の中村是公から「今度一所に連れてつて遣らうか」という誘いがあつたからで、それは「満韓」冒頭にも書かれている。では是公はただ友人の漱石に旅行させただけで誘つたのだろうか。元々是公は「満洲に新聞を起すから来ないか」（日記「漱石全集」第二〇巻、一九〇九年七月三十一日）と漱石を誘つたが断わられた。この点について朱敏は「満鉄」を「帝国の使命」を持ち「日本帝国主義の植民政策の先駆隊」になつて、「日本大陸政府の最も有力な担い手として、中国東北三省で掠奪と

謀略活動を進める拠点で、鉄道経営の機構であり、多様な機能を兼有した侵略、植民機構でもあつた」とし、「是公はこのような満鉄のために漱石を誘い、漱石もそれに応えた」と結論つけた。漱石の意図がそのようなものであれば、帝国の使命に従つて帝国主義的な発言や表現もありえるだろう。しかし、新聞の手伝いも断つた漱石が満鉄のために是公の頼みを受けて胃痛にも我慢して旅立つたのだろうか。たとえば「東京朝日新聞」の記事には「満鉄の動揺（幹部の更迭）」というタイトルで次のような記事がある。

中村是公氏満鉄総裁となりてより以來理事者との間に兎角意見の一致を欠き爲に動揺の傾向ありとは予てより聞く所なりしが今回一二理事者及社員中にも多少の更迭を見ることがなりたり國澤副総裁が久しぶりの東上も更迭に關する用向ありといへり（『東京朝日新聞』一九〇九年十月五日）

中村是公は、その前年後藤新平に続き四十歳の若さで二代総裁になつた経歴を持つている。引用の記事のような事実があつたとしたら、当時において大きな政治的意味をもつ満鉄という機構の内部動揺を、内地で著名な小説家である友人漱石を満韓旅行に誘い、満韓を旅させることによつて満鉄のことを漱石が何らかの形で書くことも予想しただろう。それによつて満鉄内部動揺に対してもある効果を与えろという期待感があつたのかもしれない。それに、漱石は当時朝日新聞社に所属していたので漱石が新聞に満鉄のことを書くことでその効果をさらに高めることも期待したのではないだろうか。

しかし、朝日新聞側においては満韓旅行後に新聞にそれに関するものを連載するということは、かならずしも前提にされてはいなかったと思われる。朝日新聞の社員であった漱石がただ遊びで満韓を旅行し、それに関するものをも一つも書かないとも思われぬが、朝日新聞との関係はこの漱石の旅には関わっていないと見たほうが妥当であろう。新聞上に漱石の満韓旅行について記されているのは一九〇九年九月三〇日の『東京朝日新聞』紙上の「朝鮮特電欄」での「夏目漱石氏、二十八日夜着す」という記事で、漱石が朝鮮に着いたことが分かるだけである。その二十日後である十月十八日に「満韓の文明」というタイトルで「昨日歸朝せる漱石氏談」が載せられて漱石が戻ってきたことが分かる。「満韓の文明」の冒頭には「満韓視察談ですか視察所ぢやない空に遊んで来たのだから話す程のことではありません」と書いているように、はっきりとした目的があつて旅をし、「満韓」を執筆したとは思えない。ここで考えられるのは漱石の満韓旅行の動機とは是公という親友からの頼みという個人的なものであつたことが最も妥当と言えるであろう。

三．「満韓の文明」と「満韓視察」

改めて述べるまでもなく当時朝日新聞社に所属した小説作家であった漱石は、一九〇九年十月十四日に「それから」の連載を終えていた。『東京朝日新聞』の小説欄は三面の一番下にあり、「それから」の後は泉鏡花の「白鷺」の連載がスタートする。「満韓」の連載は、東京では十月二十一日に、大阪では一日遅い二十二日に始まる。連載が始まる前の十月十八日に『東京朝日新聞』には「満韓の

文明」が、『大阪朝日新聞』には「満韓視察」が掲載されている。しかし、「満韓の文明」の方は第二版¹³では掲載されていない。『朝日新聞』のデータベースは原則的に最終版を基にしたものであるが、十月十八日は第二版が使われており、データベース検索では「満韓の文明」が見つからない。それ故か一九九〇年代前に刊行された『漱石全集』には「満韓の文明」が載せられていない。内容の大概は「満韓視察」と同じだが、「満韓視察」では「視察所ぢやない空に遊んで来た」と始まっているのに対して「満韓の文明」では「満韓視察談ですか」という前置き文として質問の形をとって始まっている。また、「満韓の文明」では個人的な感想を述べた後に「満韓二國に於ける日本の差違ですか」という質問に答える形式をとっている。校異としては部分的に「満韓の文明」では「迄」「其」「居る」が使われているが、「満韓視察」の方では「まで」「其の」「居る」などが使われているという差異が見られる。それ以外にも表記上の細かい違いはあるが全体の内容はほぼ同じである。ではなぜタイトルが違うのだろうか。それに「満韓の文明」の方は第二版には載せられていない。このような大阪版と東京版の違い、それから東京版で版によつて掲載の有無が発生することなどを検討することで、漱石の満韓旅行の目的と「満韓」の「韓」のない事に対するある種のヒントが得られるのではないだろうか。

まず、大阪版の方より東京版の方が漱石自信の直しが加われていると推測できる。漱石日記によると、十月十五日に大阪で朝日新聞社を訪ね素川に置手紙をする（日記『漱石全集』第二〇巻）ということがあり、昭和四十一年発行の『漱石全集』十四巻には「大阪

朝日新聞」主筆の鳥居赫雄（素川）宛書簡として牛込から出された
とされる十月末（推測）のものが載っている。¹⁵「初めの部分切れて
無し、漱石山房原稿用紙第七頁より始まる」と書かれているこの書
簡の後半に「此度旅行して感心したのは（中略）成程日本人は頼母
しい國民だと云ふ氣が起（以下缺）」という部分があり、その部分
が「滿韓視察」と「滿韓の文明」の前半の部分と一致していること
からこの書簡がこの両文の元になったものと考えられる。十月末の
鳥居からの書簡とされるこの文と漱石が鳥居に残した「日記」に
書いた置手紙が全く同じものであるかは明らかではないが、十月十
八日に東京と大阪でほぼ同じものが載っているということは漱石が
その前の十五日にその元のを大阪に残したと推測することもで
きるのである。日記によれば、漱石が東京の家に着いたのは十七日
でその翌日の『東京朝日新聞』に「滿韓の文明」が掲載される。漱
石の要求により、修正する時間が少しあつた「東京版」で「大阪
版」とは少し変わったものが掲載されたのではないだろうか。だが
ら「東京版」の最終版である「市内版」には載っている。「滿韓の文
明」がそれより早い版である「第二版」では載っていないのであ
る。十七日に東京に到着した漱石が修正のため「第二版」には間に
合わなかった可能性がある。三谷憲正も大阪の方が先に書かれたこ
とに関しては触れているが、東京の第二版ではその記事がないこと
に対してはなにも触れていない。以上のことから「滿韓の文明」の
方は漱石の帰国後、漱石の意図によって書かれて掲載されたものと
見ることが出来る。

ここで当時の朝日新聞の紙面構成を確認しておきたい。『東京朝

日新聞』の一面は広告、二面から実際の記事が始まる。漱石の連載
小説は三面下であり、十月は泉鏡花の小説が三面下に載っている。
十月十八日その日の『東京朝日新聞』は四面構成になつていて、
「滿韓の文明」は一八八〇年代からの『朝日新聞』の専属小説家で
漱石と比較すると二番手とも言える半井桃水の連載小説「貧富」と
同じ四面に載せられた。漱石のそれ以前の小説や泉鏡花のものは三
面の下に定着して二番目の小説は七面一番上の段に決まってい
た。四面になると三面下の小説には変化がないが、七面の小説が四
面に載せられる場合が多い。第二版では載せられていない漱石の
「滿韓の文明」が最終版である「市内版」には載せられ、それも
「大阪版」とは違うタイトルで掲載されたのは何を意味するのだろ
うか。次に「滿韓の文明」の内容からその意味を探ってみよう。
「滿韓」でも言及されているように支那人や朝鮮人に対して自分
が日本人でよかつたという表現がここでも見られる。

滿韓を遊歴して見ると成程日本人は頼母し國民だと云ふ氣が
起ります従つて何處へ行つても肩身が廣くつて心持が宜いです
之に反して支那人や朝鮮人を見ると甚だ氣の毒になります幸ひ
にして日本人に生れていて仕合せだと思ひました（「滿韓の文
明」『東京朝日新聞』一九〇九年十月十八日）

このように「滿韓」でも支那人や朝鮮人に対して「氣の毒」だと
哀れに思う氣持はあるが、彼らを氣の毒にさせたのが日本人である
ことに對する自覚がないことが多く批判されている。しかし漱石に

その自覚がなかったのだらうか。九月五日の満韓に向かう船の中の日記には甲板で船長と談話するところがあり、船長が次のように話たことが記されている。

南米の航海の話です。スペインの美人の話をする。亜米利加がよひの時一等運轉手として *table* に着いたものは自分一人なり。其時欧州婦人が自分の顔を見てすぐ席を立てて黄色人の隣へ坐るのはヤだと云つた事が二遍ある。日本人でもそんな奴があつた（『日記』『漱石全集』第二〇卷、一九〇九年九月五日）

東洋人を嫌う西洋人の話で日本人にもそういう奴がいるということとを船長から聞いてそれをそのまま記したことは、「西洋に対する日本」と、「日本に対する満州や韓国」が同じであることを漱石が認識していたと思つてもいいだらう。だから日記にこのような話を故意に残したのではないか。このような自覚がある漱石であるが、その一方で「満韓の文明」と「満韓」はある意図で書かれたため、「日本人が満韓の人に対して気の毒なことをした」という認識を書き込んでいないと推測できる。その意図とは前章でも指摘したとおり、中村は公への配慮である。

營業所皆夫々の方面に於て自分の意見が行はれて行はれたものが日々成功して行のみならず其成功に對する報酬が内地の倍以上に高價であるから徒らに郷土病に罹るもの、外は男子快心の事業として安んじて其職を盡す氣にならざるを得ないのだ

らうと思ひます（中略）

資本が満鐵と云ふ一手にあつて此滿鐵は西洋と對抗し得るハイカラな眞似が出来すが其他の資本金は甚だ微弱なもので到底普通の内地の中流程度にも及ばないと云ふ意味であります（『満韓の文明』『東京朝日新聞』一九〇九年十月十八日）

以上の引用から見てもわざと満州での事業や満鉄の業績を称えていることが分かる。これは「ごく自然に」書かれたというより「満州の文明」が、日本や満鉄があるために満州の文明発展が行なわれたということを見せるために書かれたという意図が窺える。では、漱石の本心もそうであつたのか。

日本流の暖國の開化は安東縣迄北進するのでさへ即ち無理でありますあのままで猶北へ押して行けば氣候の爲めに辛い目に逢ふ事だらうと信じます⁽¹⁷⁾

最後の部分にあるように満州では日本流の開化に限界があることを警戒している。理由として氣候の問題を挙げているが、氣候に係のある内容は本文では触れていない。「満韓」でも日記でも寒さで苦労したことはあまり書かれていない。この引用部分の前には歳月に伴い、北進する朝鮮の文明化と富力によつて高速に変化する満州の文明化が面白いと言つただけで、氣候が日本と違うために辛い目にあうような内容は書いていない。ただ氣候を口実に、日本流の開化を慎むようにという漱石の意図が現れているのではない

だろうか。だからタイトルも意識して「満韓の文明」に変えて、第二版には間に合わず、市内版の最終版に載せたと云えるのではないだろうか。

四、「満韓」と日記から窺える漱石の韓国観

前述したように「満韓」では「韓」の部分が書かれていない。そのため、韓国に入った漱石が何を見て何を感じたのかを「満韓」から窺うことはできない。しかし、その中でも韓人に対する認識が現れる部分がある。

人力は日本人の発明したものであるけれども、引子が支那人もしくは朝鮮人である間は決して油断しては不可ない。彼等はどうせ他の拵へたものだといふ料簡で、毫も人力に対して尊敬を払はない引き方をする。海城といふ処で高麗の古跡を見に行つた時なぞは、尻が蒲団の上に落ち付く暇がない程揺れた。一尺ばかり跳ね上げられる事は、一丁の間に一度は必ずあつた。仕舞に朝鮮人の頭をこきんと張付けて遣りたくなつた位残酷に取扱はれた。奉天の道路は海城程凸凹に出来上つていないから、無暗に車の上で踊ををどる苦痛はないが、其引き方の如何にも無技巧で、たゞ見境なく走けさへすれば車夫の能事畢ると心得ている点に至つては、全く朝鮮流である。（『満韓』『漱石全集』第十二卷、四六・三三八頁）

朝鮮人の人力車の扱い方にあきれている部分で、最後の「たゞ見

境なく走けさへすれば車夫の能事畢ると心得ている点に至つては、全く朝鮮流である」という部分は漱石の朝鮮人に対する認識であることが分かる。それでは漱石のこういう認識の根拠はどこにあるのか。偶然か、意図的かは分からないが、十月十八日「大阪朝日新聞」の「満韓視察」の下に「天声人語」があり、そこで「韓国問題」に関して論じている。

統監更迭の頃一としきり喧しかつた韓国問題も、今では殆ど忘れられて了つた、政府でも韓国ならつちへ轉んでも間違はないからといふので、氣長く統監府へ任せて置くといふ方針らしい▲それなのに韓人側では此の頃何うしたのか宋秉峻一派の日韓合邦論が勢力を得て、大韓協會などもあまり反対しないさうだ、被保護國民など、いはれて肩身が狭い境遇に居るより、一層の事合併して了へば、大國民の一部となれる、といふやうに一般の思想が傾いて來たらしい。（『天声人語』「大阪朝日新聞」一九〇九年十月十八日）

ここでは韓人に対して過程や内容はともかく結果さえよければいいという考え方をしていると述べている。日本で韓国にいる韓人の考え方を窺えるものは新聞などのメディアしかない。そういう媒体で自分の国がなくなつても外見だけ「大國民」であればいいという考えを一般國民がしているという報道があれば、たとえそれに疑問を感じても一応信用するのではないだろうか。当時「天声人語」は「大阪版」にだけ掲載されていたが、一応社の思想が含まれている

欄であろう。そういう「天声人語」で一般の朝鮮人が被保護国民になるより合併がいいと考えていると報じているのであれば漱石も朝鮮人をそのようないい加減な国民だと思ふこともあるのではないだろうか。しかし、「満韓」ではこれ以上韓国や韓人に対する漱石の認識が現れるところはない。韓国に入る前に連載が終ったからだ。

一方、漱石の日記には漱石の韓国での体験が書かれている。そのなかで漱石が韓人に対してある種の偏見は持っていたとしてもそれが必ずしも蔑視とは言えないことが分かる部分がある。

韓国観光団百余名来る。諸新聞の記事皆軽侮の色あり。自分等が外国人に軽侮せらるゝ事は棚へ上げると見えたり。(日記)『漱石全集』第二〇巻、一九〇九年四月二十六日)

日本の各新聞で韓国観光団に対して軽侮の色を見せていることに對して自分たちも外国人から軽侮されることを自覚して語っている。このような態度は前述した船長の談話からも窺えるものであった。それから実際に漱石が韓国に入った日の記述にもあまり悪い印象は書かれていない。

京城着。車で天津〔樓〕旅館へ行く。道路よし。純粹の日本の開化なり。旅館も純日本式也。(日記)『漱石全集』第二〇巻、同年九月三十日)

宿に竹があった。満韓を旅行して始めて竹を見る。午飯後又

町を散歩。髪を刈る。朝鮮人がえんやらやと云って道をならしている。あれは朝鮮人の掛声かと聞いたら左様ですと答へた。本町通りと云ふ所を通る。巡査に右へ右へと云って叱られた。

(日記)『漱石全集』第二〇巻、同年十月一日)

よく言われるような汚い、臭うなどの言葉さえも表れない。ただ見たものをそのまま書くだけであった。京城の日本式の開化についても見たままの表現だけである。この時の漱石には韓国の日本式の開化に対する感情は特に特別なものがあつたとは言えないと思われる。ただ、長い旅行からの疲労が宿にあつた竹で少し癒され、日本式である町で聞こえてくる韓人の声に、そこが日本ではなく朝鮮であることを改まって感じたのではないだろうか。だから朝鮮の風景に深い感情は入っていないと思つていいだろう。その一方、韓人の白衣がいかにも記憶に残つたのか「高麗人の冠を吹くや秋の風、韓人は白し、秋の山に逢ふや白衣の人にのみ、松の映る」のような詩も書いている。韓人が白い服を着ていたから「韓人は白し」と歌つたのではなく、その白衣と韓人に対する印象がマッチしてそのような表現ができたのではないだろうか。しかし、その何日かの後には、日本人に被害を受ける韓人の姿を「氣の毒」だと言っている。

矢野の曰く從來此所で成功したものは贗造白銅、泥棒と〇〇なり。其例をあぐ。期限をきつて金を貸して期日に返済すると留守を使つて明日抵当をとり上げる。千円の手附に千円の証文を書かして訴訟する。自分の宅地を無暗に増して縄張をひろく

する。余韓人は気の毒なりといふ。山県賛成。隈本も賛成。やがて帰る。(『日記』『漱石全集』第二〇巻、同年十月五日)

漱石が「満韓」で「韓」の部分も書いていたら韓国に対して漱石がどう考えていたか少しは推測できただろう。それがよいものであれ、そうでないものであれ、それが自然に感じた漱石の韓国印象であるならそれも明治時代の文学者の韓国認識として受け入れることができる。ある種の偏見も韓国に対する当時の日本人の認識であることは否認することはできない。だからといって悪い印象を持ったからと言って批判することもできない。それがその時代のもつ韓国像であるからである。しかし、漱石はそれを書いていない。

五・漱石の満韓旅行前後の朝日新聞の韓国関連記事と伊藤博文の暗殺

一九〇九年、九月からの『東京朝日新聞』の記事を見ると韓国に関するものが多く報道されていることが分かる。大きくは「韓銀株募集に関するもの」「日清条約に関するもの」「韓太子の動向」「暴徒に対する討伐」「間島協約」「韓国経営に関するもの(十月十日から「韓国経営観」が六回にわたって連載)」などがある。漱石が朝日新聞社に所属していた以上、このような記事を目にしてはいたはずで、日韓関係についても大概理解していたと考えてもいいだろう。条約や協約の多くは清国やロシアと韓国の利権を争うもので、当時日本に来ていた「韓太子」の動向も比較的詳しく報道されている。日清戦争、日露戦争で勝利した日本が韓国の利権を少しずつ奪って

いることはこのような記事からも窺うことができる。それに韓太子まで日本に来ていて、いくら待遇がよくても自分の国ではなく他国にいる王子は人質にすぎない。それに韓国内では韓国に対する日本の干渉や利権の侵奪に抵抗して暴動が起きるが、それも討伐されている。このような状況が分らない漱石ではないだろう。だから韓国や韓国人に対して「気の毒」だとよく言うのではないのか。

西洋の新聞は実^でがある。始から仕舞まで残らず読めば五六時間はかゝるだらう。吾輩は先第一に支那事件の処を読むのだ。今日には魯国新聞の日本に対する評論がある。若し戦争をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策でないから朝鮮で雌雄を決するがよからうといふ主意である。朝鮮こそ善い迷惑だと思った。(『倫敦消息』〔『ホトトギス』所収〕『漱石全集』第十二巻、8頁)

日露戦争が起きる前である一九〇一年ロンドン留学中であつた漱石は朝鮮が戦場になることに対して朝鮮にとつてはそれが「いい迷惑」だと思つていた。しかし、それはそのまま現実になり、朝鮮にはいい迷惑なことが起こり、その利益は日本のものになったのである。それで朝鮮に対して「気の毒」だと思つようになつたのではないのか。しかし、朝鮮人の中には日本に合併されたほうがいいと思う人もいるということは朝鮮人に対する印象を悪くするのに十分ではなかつたか。だから漱石は「満韓の文明」では日本式の文明化が進んでいることを警戒しながらも、その文明が韓人に与えた影響は

深くは考えていなかったのかもしれない。中村是公の満韓旅行誘いに応じ、「満韓の文明」を書き、「満韓」の連載をはじめた時は韓国や韓人に対して特別な感情は持たなかったと思うのが自然ではないだろうか。

しかし、同じ年の十月二十六日、「満韓」連載の五回目の日、伊藤博文がハルビンで韓国の青年に暗殺される。漱石が韓国から日本に向った十月十四日、伊藤博文は満州に向って新橋を出発していた。そして、漱石と同じ経路を経てハルビンに到着、漱石の友人である中村是公や他に満州で会った人たちが見ている中ハルビン駅で銃に撃たれたのである。漱石にとって、その衝撃は他の人より大きかっただろう。それについて漱石が直接触れたのが『満州日日新聞』一九〇九年十一月五日の「満州所感」¹⁰である。翌日まで上下に分けられ掲載された「満州所感」で漱石は伊藤博文の暗殺の号外を接し驚いたことを書いている。

昨夜久し振りに寸閑を偷んで満州日日へ何か消息を書かうと思ひ立つて、筆を執りながら二三行認め出すと、伊藤公が哈爾濱で狙撃されたと云ふ號外が来た。哈爾濱は余がつい先達で見物に行つた所で、公の狙撃されたと云ふフラットフォームは、現に一ヵ月前に余の靴の裏を押し付けた所だから、希有の兇變と云ふ事實以外に、場所の連想からくる強い刺激を頭に受けた。(『満州所感』『満州日日新聞』一九〇九年十一月五日)

伊藤博文の暗殺が十月二十六日で日本でもその号外が同じ日には

各新聞から出ている。「満韓所感」は、その約十日後に掲載されたものである。満州までの距離などを考えてもこの記事が本当に暗殺の号外を見た直後、漱石が書いたものと見てもいいだろう。漱石には伊藤公の暗殺という事件よりも、自分がいた場所で行なわれたことに対する衝撃がより大きかったと感ぜられる。それ以後も自分と満州で関わった田中理事や川上総領事、中村総裁などが同じ場所で行なわれながら軽傷であったことが書かれており、伊藤公の暗殺自体に対する漱石の批評的な認識は示されていない。

伊藤公が、余と關係の浅からざる滿鐵の線路を經過して、余の知人と同乗同車の末、未だ余の記憶に新なる曾遊の地に斃れたのは、偶然の出来事ながら、余に取つては珍らしき偶然の出来事である。公の死は政治上より見て種種重大な解釋が出来るだらう、又單なる個人の災害と見ても、優に上下の視聽を聳かすに足る兇變であらう。従つて向後數週間の間は、内地の新誌は勿論滿韓の同業記者も亦悉く筆を此一變事にあつめるに違いない。たゞ余の如き政治上の門外漢は遺憾ながら其邊の消息を報道するの資格がないのだから極めて平凡な便文に留めて置く¹¹

この箇所から見ても漱石が伊藤公の死に対して深く考えていたとは感じられない。さらに以後の新聞で暗殺関連記事が多く扱われるだろうが、自分は門外漢なので触れることが出来ないと書いてある。このことから「満韓」中断理由の一つとしてあげられる「朝日新聞の漱石に対する扱いに対する不満」は考えられないだろう。

朝日新聞の扱いへの不満に対しては小宮豊隆の「新聞の方でこの原稿を載せる事に熱心を示さなかつた事が、漱石に原稿を書き続ける興味を失はしめた為だつたに違ひないと思ふ」⁽²¹⁾という推測を青柳達雄⁽²²⁾と吉田真⁽²³⁾などが妥当だと受け入れている。漱石も指摘しているとおり、伊藤博文の暗殺事件は日本だけではなく、その周辺国に対しても大きな事件であり、毎日それだけで新聞が埋められたとしてもおかしくない事件であった。この暗殺事件は漱石に衝撃と共に韓人に対する認識の変化をもたらしたのではないだろうか。「気の毒」だと思つても韓人に対しては特別な思いはなかつた漱石であったが、伊藤博文を暗殺したのが韓人青年であることが大きな変化をもたらしたのではないだろうか。

満韓旅行の翌年の一九一〇年三月一日から連載が始まる『門』では伊藤博文の安重根による射殺事件が物語の前半で話題として登場する。石崎等は安重根の死刑執行が『門』が連載される直後である三月二十六日であることに関連して「漱石は、あるいは宗助は、伊藤・安と同じ歴史的時空間に生きていたのである。そして『門』の物語内容の時間は、ほぼ安が起こした暗殺事件に始まってその死刑が執行された時期をもつて終つてるのである」⁽²⁴⁾とし、それが偶然の一致ではないことを示唆している。玉井敬之も伊藤博文の暗殺事件が話題に出てくること、隠居した本多夫婦の生計を支えているのが韓国統監府に勤める息子からの仕送りであること、安井が満州を経て蒙古に行ったことから登場人物が「新たに獲得された植民地としての満州や韓国と何らかのかたちで繋がつていた」⁽²⁵⁾と植民地との関係を探つてゐる。

本論では右の論を踏まえたうえで、前半に登場する伊藤博文の暗殺事件の話題をめぐる宗助と御米、小六の会話から伊藤博文の暗殺事件を漱石がどう受け入れているかを考察することに焦点を当てる。

「貴方大変だつて云ふ癖に、些とも大変らしい声ぢやなくつてよ」と御米が後から冗談半分にわざ／＼注意した位である。

其後日々の新聞に伊藤公の事が五六段づ、出ない事はないが、宗助はそれに目を通しているんだか、いなんだか分らないほど、暗殺事件に就ては平気に見えた。(中略)

「どうして、まあ殺されたんでせう」と御米は号外を見たとき、宗助に聞いたと同じ事を又小六に向つて聞いた。「短銃をポン／＼連発したのが命中したんです」と小六は正直に答へた。

「だけどさ。何うして、まあ殺されたんでせう」小六は要領を得ない様な顔をしている。宗助は落付いた調子で、「矢つ張り運命だなあ」と云つて、茶碗の茶を旨さうに飲んだ。(『門』「漱石全集」第六卷、三の二・三六七頁)

御米の伊藤博文がどうして殺されたかという質問に、小六はその「理由」ではなく「手段」と「方法」という違う内容の答えをし、いっぽう宗助は「運命」にしてしまう。このような三人の問答について小森陽一⁽²⁶⁾は「もとより『門』の主人公の宗助に、日清戦争以後、韓国を独立国とするという国際条約を結びながら、日露戦争を契機として、韓国を植民地的な属国とする外交条約を、韓国の閣僚

を脅して無理矢理結ばせていった伊藤博文の履歴の詳細を御米に説明するだけの社会的関心は付与されていない。けれども「日韓併合」を目前にした状況の中で書かれていた「門」という小説において、御米本人の意識とは別に、小説の全体の構造の中で、彼女の問いかけは、宗助が自らの意識から排除している、韓国の植民地的支配の問題を同時代の読者の記憶の中から想起させる機能を果たしている」とした。実際、その理由が一般の新聞読者に明らかになるのは伊藤博文を暗殺した安重根の死刑判決が確定した一九一〇年二月十四日、裁判における安重根の供述書の紹介をとおしてである。「門」の連載はそのあとのことであり、一般新聞読者もその理由を知っているはずであり、小森の言うとおり「韓国の植民地的支配の問題を同時代の読者の記憶の中から想起させる機能」を果たしていると言っているだろう。

これにくわえ、『東京朝日新聞』の一九〇九年十一月十八日の二面記事には暗殺の十五箇条の理由が紹介されており、その三面には「満韓」の十八回が載っている。これらのことから、漱石はすでに安重根が伊藤博文を暗殺した理由を知っていたと考えられる。伊藤博文の暗殺、その事件自体は漱石に政治的意味で大きな影響を与えたとは考えにくい。ただ、その事件が起きた場所や一緒にいた人々が自分とかかわりのある人たちであることが衝撃を与え、その後に分かった暗殺理由から韓国に対する認識も変わったのではないだろうか。だから、年が変わることを口実に「満韓」の連載を終え、「韓国」に関する事は書かなかったと見てもいいのではないだろうか。「満韓の文明」や「満韓」に表れている日本の文明化に対す

る肯定的な視線に後ろめたさを感じ、「満韓」の連載の中止によって直接的には言えない韓国に対して、漱石の変わりつつある認識を表現しようとしたのではないか。

「門」では伊藤博文に関する話題の後に、それまでの内容とは関係のない達磨を登場させ、伊藤博文の暗殺理由をはっきりしないで曖昧にしようことに対する後ろめたさを比喩的に表現したとも見える箇所がある。

御米はこれでも納得が出来なかつたと見えて、

「どうして又満州杯へ行つたんでせう」と聞いた。(中略)

「已見た様な腰弁は、殺されちや厭だが、伊藤さん見た様な人は、哈爾賓へ行つて殺される方が可いんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。

「あら、何故」

「何故つて伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になるのさ。たゞ死んで御覧、斯うは行かないよ」

「成程そんなものかも知れないな」と小六は少し感服した様だつたが、やがて、

「兎に角満洲だの、哈爾賓だのつて物騒な所ですね。僕は何だか危険な様な心持がしてならない」と云つた。

「夫や、色んな人が落ち合つてるからね」

此時御米は妙な顔をして、斯う答へた夫の顔を見た。宗助もそれに気が付いたらしく、

「さあ、もう御膳を下げたら好からう」と細君を促がして、

先刻の達磨を又畳の上から取つて、人指指の先へ載せながら、「どうも妙だよ。よく斯う調子好く出来るものだと思つてね」と云つていた。(「門」「漱石全集」第六卷、三の二・三六八頁)

問いかける御米に対し、曖昧な答えをする宗助、宗助の答えに納得する小六。しかし、御米は宗助の答えに納得できない様子を見せる。まるで、御米が社会現象に対して問いかける側であれば、宗助はそれに対して明確な答えができない理論家のようにであり、小六は理論家の曖昧な答えにも納得する一般読者にも見える。一九一〇年の日本社会で、植民地支配に対して問いかけた人はいたのだろうか。御米の問いかけは問いかけない人々に対する問いかけかもしれない。そして、宗助ははっきり言えない自分がどこか傾いているのではないかと、よくバランスを取っている達磨を見ながら、自分自身に対して疑問を抱く。それは、満州や韓国での日本の文明化を讃えた「満韓」や「満韓の文明」に対する、漱石のそれまでのある種の「傾いていた姿勢」を「満韓」の連載中止によつて、バランスを取り戻そうとした漱石の姿ともいえるのではないか。

おわりに

本論では「満韓ところぐ」をめぐってなされてきた批判的観点を少し変えて、当時書かれていた漱石の他の書物からの言及との関係から漱石の韓国認識を再検討した。漱石が満韓旅行に行ったのは友人の中村是公の頼みがあったからであり、是公への配慮から「満韓」や満韓旅行の報告書の形でもある「満韓の文明」では、日本式

に文明化が進んでいる満韓に対して批判的な観点は書いていないことを考察した。しかし、書く予定であった「満韓」の「韓」の部分に対しては書くことが出来なくなり、途中でやめてしまう。満韓旅行の途中、漱石にとつて韓国や韓人が深い印象として残っていたわけではないため、日記での記述は特別な感情が表れていないことが窺えた。

しかし、満韓旅行を終えてからまもなく伊藤博文が暗殺され、漱石は暗殺事件自体より、自分の足で踏んだばかりのところでの自分の知り合いたちがその事件に遭遇したことに衝撃を受け、伊藤博文が暗殺された理由まで考えることになる。このようなことが漱石に韓国について自らに問いかける契機になったのではないだろうか。それゆえ、それまでには日本人が満韓の人々より優秀であることを書くことができたが、その後、それが書けなくなつたのではないだろうか。安重根が伊藤博文を暗殺した理由まで推測できた漱石には、韓国に対して日本人の優越性を書くことはできず、途中で連載中止の決断に至つたと思われる。新聞などを通して接していた韓国とは違う韓国を漱石は、満韓の旅行から経験し、また伊藤博文の暗殺事件を他の人とは違う感覚から受け入れ、それが韓国認識を大きく変えるきっかけになつたのではないだろうか。だから「韓」の部分の連載を諦め、未完の「満韓ところぐ」が生れたのである。

注

(1) 以下、「満韓」本文の引用は『漱石全集』第一二巻、一九九四年一月、岩波書店、「門」第六卷、同、同年五月、「日記」、二〇巻、九六年

七月等により、適宜、章・頁を付した。なお、『漱石全集』に載せられていない、後述の「満韓視察」と「満韓の文明」、「満韓所感」はそれぞれ初出である。『大阪朝日新聞』（データベース「開蔵IIビジュアル」）、『東京朝日新聞』（復刻版、日本図書センター、二〇〇〇年十二月）、『満州日日新聞』（国会図書館マイクロ資料を底本とする）。

- (2) 一三九二年から始まった「朝鮮」が一八九七年から一九一〇年まで使用した国号が「大韓帝国」であり、その間の国号を認識していた人は「韓国」と呼ぶ場合もあり、漱石はそのように認識して「満韓」と言っていたことが分かる。しかし、その後日本の植民地になり、また「韓国」とは呼ばれなくなった。一方、韓国では「大韓帝国」の時代も「朝鮮」として認識している。本論では、「韓国」を基本とするが、便宜上「朝鮮」を使う場合もある。

- (3) 中野重治「漱石以来」（一九五八年三月五日『アカハタ』『中野重治全集』第二十三巻、一九七八年、筑摩書房）。

- (4) 針生一郎「明治文学における自我と民衆」（『文学』一九七六年七月）。

- (5) 朴裕河「漱石『満韓』ところ／＼論—文明と異質性—」（早稲田大学『国文学研究』一〇四巻、一九九一年六月）。

- (6) 朴春日「近代文学における朝鮮観」（一九六九年十一月、未来社）。

- (7) 呂元明「夏目漱石『満韓』ところどころ私見」（『近代日本と—偽満州国』九七、六、不二出版）。

- (8) 米田利昭「漱石の満韓旅行」（『文学』第四十巻第九号一九七二年九月、岩波書店）。

- (9) 伊豆利彦「漱石と天皇制」（一九八九年九月、有精堂）。

- (10) 『漱石全集』第十二巻「満韓」一・二二七頁。

- (11) 朱敏「漱石の満韓旅行とその紀行文—その本質をめぐって—」（『実践國文学』五十三、一九九八年三月十五日、実践文学会）。

- (12) 一九〇九年八月二十九日の漱石日記には「朝泉鏡花来。月末で脱稿せる六十回ものを朝日へ周旋してくれといふ。池辺不在故玄耳へ手紙をつけてやる」とあることから漱石の推薦で泉鏡花の小説が『朝日新聞』に連載されることが分かる。

- (13) 当時『東京朝日新聞』の最終版は「市内版」でそれより早い版で「市外版」「第三版」「第二版」などがあった。

- (14) 『漱石全集』第二十五巻（一九九六年）に「満韓の文明」とその草稿が収められた。

- (15) 一九九六年の『漱石全集』に収まっている「満韓の文明」の「草稿」がこの書簡と同じものと見られる。この草稿には書簡の前の欠落の部分が載せられているが、後半の欠落は同じである。一九九六年の『漱石全集』の書簡には鳥居宛の十月末の書簡は載っていない。

- (16) 「夏目漱石におけるあじあ—『朝鮮観』を視座として—」（『佛教大文学総合研究所紀要』創刊号、一九九四年三月十四日）。

- (17) 引用は同右による。

- (18) 金正勲「漱石と朝鮮—矛盾を越えて透けて見えるもの—」（『近代文学研究』二六号、二〇〇九年四月）でも「朝鮮旅行での漱石日記を辿って見ると、朝鮮の風景、文化、歴史などを見る漱石の視点に植民地朝鮮を支配する日本人が持ちがちの差別、蔑視の表現はあまり見られない。漱石の真の人間的な姿はこのようなものであったのではないか」と日記での朝鮮描写から漱石に朝鮮観を窺っている。

- (19) 「満州所感」の発見をモチーフとした小説が『新潮』（二〇一三年二月）に掲載された。黒川創「暗殺者たち」で同年五月三二日新潮社から単行本『暗殺者たち』も出版された。

- (20) 引用は同右による。

- (21) 小宮豊隆『夏目漱石』（一九三八年七月、岩波書店）。

- (22) 青柳達雄「漱石と渋川玄耳——『滿韓ところへ』中斷の理由について」(『漱石研究』十一、一九九八年十一月二十日、翰林書房)。
- (23) 吉田真「夏目漱石『滿韓ところへ』論」(『成蹊人文研究』第八号、二〇〇〇年三月十八日)。
- (24) 石崎等「夏目漱石—テクストの深層」(二〇〇〇年七月、小沢書店)。
- (25) 玉井敬之「『門』——の中夫婦のゆくえ」(『漱石研究』十七、二〇〇四年、翰林書房)。
- (26) 小森陽一『ポストコロニアル』(二〇〇一年四月二十三日、岩波書店)。
- (27) (一) 王妃の暗殺、(二) 三十八年十一月の韓国保護条約五箇条、(三) 四十年七月、日韓新協約七箇条の締結、(四) 韓皇帝の廢立、(五) 陸軍の解散、(六) 市民殺戮、(七) 利権掠奪、(八) 教科書燒棄、(九) 新聞購読禁止、(十) 銀行券の発行、(十一) 三百万円の国債の募集、(十二) 東洋平和の攪乱、(十三) 保護政策の伴わざること、(十四) 日本支帝孝明天皇を弑害したること、(十五) 日本及び世界を瞞着したること

*本論の引用はすべて底本の表記を基本とし、ルビは省略した。

(ユ ウンキョン 本学大学院博士課程後期)